

Ⅲ 小学校「児童一人一人が伸びる教育を目指して」

1 児童一人一人が伸びる教育

この章のタイトルは「児童一人一人が伸びる教育」であり、「伸ばす教育」ではない。伸びる主体は児童であり、学校や教師はそれをどのように支えていくのかが問われている。今、様々な背景により多様な教育的ニーズのある児童がいる。全ての児童に対して、自立と社会参加を見据えて、教育的ニーズに的確に応える支援を提供することが重要になっている。

2 多様な児童の状況

特別支援学級や特別支援教室に在籍・通級する児童生徒は増加しており、小・中学校の通常の学級においても、「学習面又は行動面で著しい困難を示」し、特別な教育的支援を必要とする児童生徒が8.8%在籍していると推計されている。¹⁾ さらに、特定分野に特異な才能のある児童生徒の存在も指摘されている。また、日本語指導が必要な児童生徒（外国籍・日本国籍含む）も増加しており、公立学校における令和3年度の該当児童生徒数は58,353人になっている。²⁾

生徒指導上の課題も大きくなっている。4年度の小学校の状況を見ると、暴力行為の発生件数は61,455件（前年度より13,317件増）、いじめの認知件数は551,944件（前年度より51,382件増）、不登校児童数は105,112人（前年度より23,614人増）になっている。³⁾

「令和5年度 全国学力・学習状況調査」において、国語は14問中9問、算数は16問中5問が、選択肢を選ぶ「選択式」の問題である。選択式問題の無回答率は国語では1.0～9.5%、算数は0.7～4.9%であり、解答すること自体を諦めている児童がいると推測される。⁴⁾ これらの児童は「学習性無力感」に陥っているのではないかと思われる。⁵⁾

上記以外にも様々な児童がおり、困難を感じながら過ごしている児童が少なからずいると推測される。今、児童一人一人に応じた適切な支援が求められている。児童が育っていく先を見通し、児童自身が伸びていく力を培うことが大切である。

3 児童一人一人が伸びる教育の実践例

(1) 学校の概要（狛江市立狛江第三小学校）

全児童数 610名	通常の学級の数 20	在籍児童数 604名
	情緒固定学級数 1	在籍児童数 6名
	特別支援教室数 1	通級児童数 92名（本校56名、他校36名）
教職員数 44名（うち情緒固定学級担任 2名、特別支援教室担任 8名）		

(2) 校長の学校経営計画

① 学校の教育目標

児童を主体として、教職員が支援していこうとしている。

- (1) 進んで学び、考える力、表現する力を高めようとする子
- (2) 認め合い、支え合い、協力して行動しようとする子
- (3) 心と身体の健康を考え、進んできたえようとする子

② 目指す学校像（抜粋）

- (1) 子供一人一人がよさを発揮し、意欲的、創造的に活動する学校
- (2) 教職員が教育活動のために指導力を研ぎ、一致協力して組織的に教育活動を展開できる学校

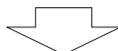
「子供一人一人」を主語として、意欲的、創造的に活動できる学校づくり目指し、そのために教職員が研鑽し、組織として高いレベルでの教育活動を目指している。

③ 令和5年度の学校経営の理念と具体的方策（抜粋）

【学校経営の理念】

- ◎ 「チームKOMA3」
- ア 「“子供ファースト”の教育活動の推進」
- イ 「教職員が働きやすい職場環境の構築」

【具体的方策】（抜粋）



- | | |
|-----------|--|
| ア 学力の向上 | <ul style="list-style-type: none">・ 目的意識をもって進んで学習に取り組めるようにする。・ 質の高い個別指導を重視する。・ 問題解決型の授業を実施する。 |
| イ 豊かな心の育成 | <ul style="list-style-type: none">・ 児童一人一人がよさを発揮して成長できる学級集団を形成する。・ 「主体的・対話的で深い学び」に取り組む教育活動を進める。 |
| ウ 組織力の向上 | <ul style="list-style-type: none">・ 「さらによくするには」「どうすればできるのか」を念頭に、具体的に働き方改革を進める。・ 管理職が率先して相談しやすい環境づくりに努めるなど、働きやすい環境へ改善する。・ 担任の抱え込みを排除し、学年担任としての意識をもち、迅速・誠実・的確な問題解決を行う。 |

(2) 学校経営計画に基づく学校経営の実際の例

① 学校経営の柱についての共通理解と具体化の推進

「“子供ファースト”の教育活動の推進」及び「教職員が働きやすい職場環境の構築」を全教職員の自己申告に位置付け、具体的に取り組むことを記述させている。これに基づいて当該教職員と管理職とで話し合っ共通理解を図り、推進している。

② 働きやすい学校環境構築の例

これまで月に1回、水曜午後に開催していた職員会議を廃止し、教材研究や授業準備等ができるようにした（「ハートフルの日」）。このことにより、特別支援教育に関わる教職員を含めて全教職員が職員室に集まって情報交換や悩みの相談をするようになった。従来の職員会議の内容は、ICTを活用して全教職員に配信して意見交換をするようにした。

③ “子供ファースト”の教育活動を推進するための取組の例

令和4年度にインクルーシブ教育システムによる学校づくりをテーマとして校内研究を進めた。その結果、教職員が児童の強みに着目して指導を行うようになった。今年度はこの成果を基に、校内研究とは別に、インクルーシブ教育に関わって同じ関心をもつ教職員で進める「マイプロジェクト」が行われるようになった。メンバーには管理職も含まれている

(3) 指導の具体例

① 通常の学級における指導の例

ア 「心理的安全性」を確保する

担任は「その子らしく過ごしてほしい」と考えており、「みんなと同じでなくても大丈夫」ということを様々な機会を捉えて伝えてきている。例えば、忘れ物をしても叱ることはせず、どのようにすれば忘れ物がなくなるのかを児童と一緒に考え、支援している。また、大勢の前で発言をすることを苦手とする児童が順番で発言しなければならない時には、意思表示しやすい質問にする工夫をし、気後れすることなく意思表示ができる体験を積み重ねている。

イ 教師が他の児童との橋渡し役になり、コミュニケーションを図る

担任は児童どうしのやりとりも大切だと考えており、コミュニケーションの苦手な児童の声が小さかったり、他の児童が分かりにくい表現だったりした場合、発言の意を汲んで他の児童が分かりやすいように言い換え、児童間の橋渡し役を行っている。「学級集団分析尺度 Q-U」を用いて学級集団づくりを研究してきている河村茂雄は、教師が学級全体に働きかける全体対応と個別に働きかける個別対応だけではなく、児童間の相互理解を促し、児童どうしを対等につなげようとする「架け橋対応」が積極的に行われている学級は、どの児童も学級に満足していると記している（「教育展望」2023年10月号 P8～P9）。

ウ 児童が選択する機会を多く設ける

担任の教師は児童の「やってみたい」という気持ちを大切に授業を進めたいと考えており、児童自身が選択し決定する機会を多く設けるように努めている。

(ア) 児童に学習したい内容を選択させる

- ・ 教科書の音読をする際に音読したい箇所を児童に選ばせ、そこを音読させる。
- ・ 調べ学習等をする際、児童に調べたい内容を決めさせて調べさせ、発表させる。 など

(イ) 児童に学習したい方法を選択させる。

- ・ 調べ学習で調べる方法（タブレット、資料集、それ以外の方法）を選択させる。 など

(ウ) 児童に学ぶ場を選択させる。

- ・ 跳び箱運動で様々な練習の場（マットのみ、跳び箱の段数が低い、マットを敷いた場など）を用意し、児童が自分に適している場を選択させ取り組ませる。 など

エ 児童の育ちについて他の教師や保護者と情報を迅速に共有する

児童ができるようになったことなどを、連絡カードを使ってその日のうちに保護者へ伝えるようにしている。このことによって保護者と担任との共通理解に基づいた接し方、支援ができる。同学年の教師をはじめ、特別支援教育関係の教師とも情報を共有し、指導の次のステップへの足がかりとしている。放課後、同じ職員室で全教職員が仕事をするようになって教師間のコミュニケーションが自然と行われるようになってきている。

② 特別支援教室における指導の例

児童一人一人の発達特性の理解を大切に、特別支援教育の知識に基づいて、次のようなことができるようにする指導を行っている。

- ・ 児童が自分の強みを知り、成功経験を積み重ねて自己肯定感を高めること
- ・ 困っていることを相談して解決方法を発見できるようにすること
- ・ 安心して人とつながったり頼ったりできるようにすること

ア 自分自身を知り、自分に合った学び方で学べるようにする。

児童が自分の好きなことや得意なこと、よさや強み、困っていること、できるようになり

たいことを意識し、自分にあった学び方（安心し集中できる環境、分かりやすいのは読む方が聞く方かなど）を探り、在籍学級や家庭で実践できるようにしている。

イ 自分の気持ちを知り、相手や状況に合わせて伝えられるようにする。

自分の感情を言語化し、相手や場に応じた伝え方ができるようにしている。自分に合った感情を落ち着かせる方法を選択することによって、児童は納得して取り組んでいる。

ウ 通常の学級の児童の特別支援教室についての理解を深める。

全学年児童に対して、特別支援教室についての理解を深めるため、勉強の内容や方法の説明、授業体験などを発達段階に応じて行う理解教室を開催している。通常の学級の児童は、通級する児童一人一人に合った道具を使うことなどについての理解を深め、通級する児童が在籍学級で違和感なく過ごせるようになってきている。また、通常の学級の児童にとっても自分の特性について詳しく理解し、自分に適した用具や生活の仕方を知る機会にもなっている。

③ 自閉症・情緒障害特別支援学級における指導の例

自閉症・情緒障害特別支援学級には、知的な障害や身体的な障害はないが、音やにおいに敏感だったり、集団の中では疲れやすかったりして、力を発揮することが難しい児童が在籍している。学ぶ力を発揮できるよう環境を整え、コミュニケーションの取り方、自分の得意なことを伸ばす方法、苦手なことに対処する方法が身に付けられるようにしている。児童が自分に合った環境を選択できるようにし、自信がもてるようにすることを基本にしている。

ア 児童の選択を大切にす。

- ・ 児童が一人で集中したい時は、パーティションで仕切られた個室で学習できる。
- ・ 自分に合った椅子を選ぶことができ、学習への集中力を高めている。
- ・ 通常の学級と交流する時はオンラインで学習したり、アバターで参加したりできる。

イ 児童が自分自身を理解できるようにする。

- ・ 児童が自分の感情をコントロールするため、気持ちを言語化させる。
- ・ 言語化されたことを基に児童と話し合い、落ち着ける場所など、よりよい対応を考える。
- ・ 児童が選択した方法が適していない場合、さらに選択し直せるようにする。

ウ 他の人の気持ちを理解できるようにする。

児童が気持ちを視覚化して話し合うことで、異なる気持ちの人の存在を理解できる。

エ 成功体験を繰り返し自信がもてるようにする。

言葉での表現は不得手な児童が、気持ちを表した絵カードを作成し表現するようになった。さらに保健室用のカードも作成し、話すことが苦手な児童も気持ちを伝えられるようになった。この児童は絵を描くことがより一層好きになるとともに、会話に自信をつけていった。

④ 不登校児童への関わりの例

ア A児の事例

A児は幼稚園の時から登園しづりが始まり、5年まで他校の通級指導学級へ通った。6年になる前に就学相談を受けて本校に転入し、自閉症・情緒障害特別支援学級に通学するようになった。A児を交え保護者と話し合いを行い、本児が安心して過ごせることをベースに、以下のような支援を行った。A児は本校を卒業し、中学へ進学している。

(イ) 安心して過ごせる環境づくり

- ・ 1学期は無理のないように登校時間を短くして、自分のペースで過ごせるようにした。
- ・ 移動教室は集団行動に不安があるため自家用車で移動し、見学は班行動で行うなど、本人に適した行程にした。移動教室で初めて友達ができた。
- ・ 2学期に通常の学級の授業に参加するようになった。疲れたら特別支援学級に戻れるようにした。通常の学級で学ぶ時間が増えていった。

(ウ) 力を発揮できる場の設定

特別支援学級では、先行してプログラミングを学習していた。通常の学級でのプログラミング学習開始後、A児が通常の学級でプログラミングの説明をすることができた。

イ テレプレゼンス・ロボットの活用の例

(ア) テレプレゼンス・ロボット (Telepresence Robot)

テレプレゼンス・ロボット (TR) は、テレビ会議、ロボット、遠隔操作技術を組み合わせたロボットで、遠方からある場所で存在 (プレゼンス) させることができる技術である。

(イ) TR 活用のきっかけ

特別支援学級担任は不登校児童が他の児童とつながることができる方法を探していたところ、TRの技術を知り、校長に相談して活用が開始された。

(ウ) TR の活用の例

不登校児童は教室に設置されたTRを、家庭で情報端末を操作して授業に参加している。TRは操作で首を振って画面の向きを変え、見たい方向を見ることができる。画面に自分の顔を映し出すこともできるが、不登校児童は主にアバターの顔を使っている。声を出さなくてもクリック一つで表情を変えたり、チャットで文章を打ち込んだりすることもできる。

特別支援学級では少人数で学習しているが、通常の学級との交流もある。これまで通常の学級と特別支援学級をオンラインでつぐ交流もあったが、TRによる交流も可能になった。TRを使って、鑑賞会や外部講師の特別授業、展覧会等にも参加している。他の児童はTRを受け入れており、校庭や体育館などで見かけると近寄り会話を楽しむようになっている。

本児はTRを活用して卒業式に参加し、卒業証書授与の呼名の際には自宅から返事をした。また集合写真にもアバターで写ることができた。卒業式後、本児は「最後だから担任の先生に会いたい」と言って登校し、校長から卒業証書を授与された。

(エ) TR の活用からの知見

児童と教師との信頼関係が構築されていること、そして、在籍学級に温かい雰囲気醸成されていることが前提である。全ての児童がTRに適しているとは限らない。その児童に適していると考えられる方法をいくつも用意し、その中から本人が選択することが大切である。

4 実践例についての考察

本校では「子供一人一人がよさを発揮し、意欲的、創造的に活動する学校」づくりに取り組み成果を上げている。成果を上げている要因と今後の展望について述べる。

(1) 成果を上げている要因

ア 管理職

- ・ 教職員の自己申告に校長の学校経営の柱を位置付けさせて具体的な取組を考えさせ、管

理職と話し合うことにより、互いの理解を深めている。

- ・ 経営計画に示したことを具体的な形で実施した(職員会議の廃止、「マイプロジェクト」)。
- イ 教師
- ・ 児童の心理的安全性の確保に努め、児童は安心して自分の力を発揮している。
 - ・ 橋渡し役になって児童間のコミュニケーションを図り、児童は満足感を高めている。
 - ・ 様々な場面で児童自身に選択させ、取組への意欲を高めている(内容、方法、場など)。
 - ・ 常に児童に適した新たな方法を探し、児童の選択の幅を広げている。
 - ・ 教師間、教師・保護者間で児童についての情報交換を密に行い、共通理解を深めている。
 - ・ 通常の学級の児童に特別支援教育についての理解教室を実施し、理解を深めさせている。
 - ・ 児童の自己理解を進め、相手や状況に合わせた表現ができるようにしている。
 - ・ 児童が力を発揮できる場を設け、自信が持てるようにしている。

(2) 今後の展望

- ・ 管理職を含め公立学校の教職員には異動がある。成員が替わっても、学校が目標に向かってチームとして機能していくためには、実践の成果と課題を記録に残して共有するとともに、それを反映した次年度の各種の計画を作成することが重要であると考える。
- ・ 児童の選択の幅をさらに広げられるとよいと考える。ダニエル・ピンクは、自律性を高める4つの要素として「課題(Task)」「時間(Time)」「手法(Technique)」「チーム(Team)」を挙げ、これらの自己決定が重要であると述べている。⁶⁾

5 提言

「私たちの教え方で学べない子には、その子の学び方で教えなさい」と上野一彦東京学芸大学名誉教授は語っている(平成21年3月講演)。学校には多様な教育的ニーズのある子供たちがいる。「子供」として一括りにするのではなく、子供一人一人に応じた教育が大切になる。校長はそのことを学校経営計画に明確に位置付け、教育活動を具現化させることが必要である。そのためには、教職員とのコミュニケーションを活発にして、一人一人が自分の取り組むべき内容と方法を十分に理解できるようにすることが求められる。また、地域に開かれた学校という観点から、学校運営協議会の理解と協力を得ることも重要であると考える。

《参考・引用文献》

- 1) 「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果」(文部科学省 令和4年12月13日)
- 2) 「『日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査(令和3年度)』の結果(速報)」(文部科学省 令和4年3月25日)
- 3) 「令和4年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」(文部科学省 令和5年10月4日)
- 4) 「令和5年度 全国学力・学習状況調査 報告書(小学校 国語・小学校 算数)」(国立教育政策研究所 令和5年7月31日)
- 5) 「うつ病の行動学—学習性絶望感とは何か」(M.E.P.セリグマン、(監訳)平井久、木村駿 誠信書房、1985年)
- 6) 「モチベーション3.0」(ダニエル・ピンク、(訳)大前研一 講談社+α文庫、2015年)